

親の住居観

滋賀大教育

○山崎古都子

京都府大生活科学

町田玲子

目的 本研究は昨年に引き続いて、本報告では家庭における住教育の態度を左右する親の住居観（生活の関心中の住の位置、住生活上の関心の内容、地域環境への心がけ）を明らかにする。（本研究は1987-88年の文部省科学研究費の助成を受けた）。

方法 昨年の研究において調査対象者に一戸建て住宅の居住者が多かったため、校区にアパートを多く含む京都市内の小学校2校を加え、昨年と同様小学校5、6年生の子供を持つ親を対象に学校を通してアンケートを配布回収する追加調査をした。これによって本研究の対象者は昨年の報告分と加えて、京都府、滋賀県下8校924件である。

結果 住生活の関心を生活の関心中第1位に挙げたものは24%で、食生活、教育問題について3番目に位置づけられる。住生活の関心は核家族、共同住宅居住者、伝統産業・住宅混合地域で高い。住生活の関心の内容を林の数量化理論Ⅲ類を使って、住宅問題、日常家事作業、近隣関係、伝統の維持の4タイプに分類したところ、日常家事作業のタイプに分類された項目に最も関心が集まった。しかし、4タイプには生活の中での住生活の関心の順位、地域、家族型、住宅形式・用途、建築年代と有意差がみられた（有意水準0.01%）。そしてこの4タイプは住宅の需要・取得段階を表していることが明らかになった。

地域環境に対する心がけの内容はコミュニティ指向型、個別助け合い型、自己完結型に分かれた。回答は自己完結型が大半であったが、コミュニティ指向型は新興住宅地に少なく、京都市内の伝統的工住混合地域の居住者に特徴的にみられた。また個別助け合い型は共同住宅居住者に比較的多くみられた。（本研究は今井康子さんに多くの協力をえた。）